
あなたが好きで、

愛珂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたが好きで、

【Nコード】

N4013A

【作者名】

愛珂

【あらすじ】

楠本沙哩は、ある朝自分のベットにもう一人の自分を見つける。

それは、自分がこの世の人ではなくなってしまうと言う動かぬ証拠だった。沙哩は思い出の場所に行く。そこで、一人の少年に恋をする……。

1話 私は死んだ（前書き）

初めまして。愛珂といいます。まだ書きなれない小説ですが、どうぞよろしくお願いします。

1話 私は死んだ

私は楠本沙哩 くすもと さり）。

ごく普通の、何処にでもいる様な高校生

・・・のはずだった。

どう言う訳かは知らないけど、

朝、いつもと同じ時間に、いつもどおりに起きたら、

周りの人には私は見えなくなっていて。

極めつけはこれ。私の部屋のベッドの上に横たわっている、私。

私は、そのもう一人の私の頬に触れた。

冷たかった。人が本来持つているはずの温もりが、欠けていた。

ああ、そうか。私は死んだのか。

何故か、私は「自分の死」を素直に受け入れることができた。

いつもの私なら、まず無理だろう。

だけど、今の私は、自分でも吃驚する程冷静だ。

その冷静な私はこれから先どうするべきなのか、を考えた。

私の出した結論は、死後の世界へ行くこと。

世間で言うところの、「天国」か「地獄」か。

そんなところがあるなんて、信じていなかったし、考えもしなかった。

普通なら、そんな世界ありえないから。

でも、それを言ってしまったら、今のこの状況もありえないわけだし。

きっとどこかにある。そう信じるしかないだろう。

私は部屋を出て、階段を下り、居間を通り過ぎた。

お母さんがいた。

恐らく、私が死んだことに気付いていないのだろう。

テーブルには、冷たそうな味噌汁と、乾燥してがちがちなったご飯があった。

「もうお母さんの手料理、食べられないんだなあ」

そう思うと、涙が溢れてきた。

・・・幽霊（？）になったはずなのに、

涙が出るなんて変な話だ。

おまけに、空も飛べないし、壁もすり抜けたりはしない。

意外と現実的なんだなあと変なことに感心していたら、

お母さんの独り言が聞こえてきた。

「沙哩、遅いわねえ。いつもだったらとくに仕度ができてる時間なのに。」

・・・もしかして、風邪でも引いたのかしら・・・」

そういうと、お母さんは階段に向かって歩き出した。

部屋にいる私の体を見たお母さんが、

どんな反応をとるかなんて、容易に想像できた。

私は、そんなお母さんの姿を見たくなくて、

急いで家を飛び出した。

自分の家を見上げる。

「お母さん、ごめんね・・・こんな娘で、ホントに・・・っ」

私はその場に座り込んで、

体中の水分がなくなってしまうような程の涙を流して、
今まで自分を育ててくれた、愛おしい人に謝り続けた。

1話 私は死んだ（後書き）

如何だったでしょうか？

これから、曲がりなりにも続けていこうと思います。

2話 出逢い

自宅を後にした私は、
自分が通っていた高校に足を運んでいた。

何故まだ私がこんなところにいるのか。その理由は簡単だ。
死後の世界に行く、といつても、

私は勿論死んだ経験はない。

だから、どこから、どうやって行けばいいのかなんて
知っているはずもない。

その術を見つげるために、自分の生まれ育った街を歩いていたら、
いつの間にかここに来てしまった、というわけだ。

まだ登校時間前の学校は、静かで、それでいてどこか優しさを感じ
た。

私は陸上部で、3週間後には地区大会も控えていた。

切ない想いを胸に、

朝日を浴びて輝いている校庭に向かった。

そして、誰もいないスタートラインに、静かにたたずんだ。

「用意、スタート！」

私は、きっとこれが最後になるであろう、一人きりの部活を、
体全体で味わうことができた。

教室にも足を運んだ。

3階の、2年1組。一番前の席。私の居場所。

明日あたり、菊の花でも飾られるのかな。

そんなことを考えていると、誰かが入ってきた。

チラッと見たところ、「相葉^{あいば}猶^{なお}」と言う、

あまり話したことのない、隣の席の男子だった。

・・・と言っても、今の私は誰にも見えないわけだから、相葉のことは放っておいて、机に寝そべることにした。

死んでしまったわけだから、眠気はないけれど、

よくこうしていて、先生達に怒られたな、と思うと、

少し寂しくなつて、また涙が流れた。

今度は静かに、ゆっくりと・・・。

「・・・楠本・・・？どうしたんだ？私服で来たりして・・・
なんで、泣いてる？」

私は驚いて振り返った。そこには相葉がいた。

相葉は心配そうに、そして、まっすぐに・・・

私の目を見ていた。

3話 もう二度と・・・

何故なのだろう。

私の姿は、誰にも見えないはず。

その証拠に、私は、自分の母親にも気付いてはもらえなかった。それなのに、何故？

正直に言つて、私と相葉の接点は「席が隣」
・・・ただそれだけ。

私は言葉が出ず、ただ相葉を見つめていた。

ガラッ

またしても誰かが教室に入ってきた。

その人は他でもない、私の親友の、みやり みゆう宮入未優だった。

もしかしたら、お母さんは寝ぼけていただけで、
本当は私は誰にでも見えるのではないか・・・？

そんな考えが頭をよぎった。

私は、思い切つて、未優に声をかけてみることにした。

「未優・・・？」

未優は、私の方を向いた。

気付いてもらえた！ 私は嬉しさのあまり、泣きそうになった。
しかし未優は・・・

「あれ？相葉じゃん。早いねえ！いつもは遅刻寸前くらいなのに！」
そう嬉しそうに話す未優。

・・・未優は私ではなく、相葉を見ていた。

そういえば、未優は相葉のことが好きって、言ってたっけ。

それは、好きな人と2人きりになれたら、誰だって嬉しいよね。

でも、違うよ、未優。私は、ここに居る。

私も、ここに、この教室に居るんだよ？何で、気付いてくれないの？

私は、耐えられなくなって、教室を飛び出した。

私は、どうかしている。

ついさっき、見たはずなのに。

現実を、受け入れたはずなのに。

何故、こんなにも哀しいのだろう？

何故、涙が止まらないのだろうか？

気付くと、私は校舎の最上階、つまり屋上に立っていた。

ここには、未優とよくお弁当を食べに来たっけ。

おかず交換も、したなあ。

未優の家の卵焼き、すごくおいしくって、

毎回毎回一切れもらってたっけ。

そうだ、「死」はこんなにも冷たい。

あの日々に、私はもう二度と出会えないんだ。

4話 温もり

屋上から校庭を眺めていると、
ドアが勢い良く開いた。

そこに居たのは、相葉だった。

「・・・どうなってんだ？」

「え？」

「え？じゃないだろ。なんで宮入はお前のことシカトしたわけ？
仲良いんじゃないの？」

そうか。相葉は私のことを心配してくれているんだ。

そう思うと、知らず知らず、涙は出てきた。

泣いたりしたら、また相葉に心配をかけてしまう。

それが嫌で、私は涙を拭い、必死に笑おうと努力した。
だけど、人はなんて脆い生き物なのだろう。

私の泪は、止まると言うことを知らなかった。

そんな私に相葉は、たった一言、こう言い放った。

「無理すんな。」

私は、その言葉を求めていたのかもしれない。

その証拠に、私はこの時、死んでから初めて心から安堵した。
私が見える人がいてくれて、本当に良かった。

その人が、優しい人で、良かった。

相葉に、この状況を訊いてもらおう。

そんなことをしたって、何も解決しないことは、充分すぎる程に、分かってる。

そういうことではないんだ。

自分でも説明はできないが、とにかく、感謝を伝えたい。

相葉なら、きっと最後まで訊いてくれるだろう。

私は、勇気を出して、相葉に話しかけることにした。

「あの・・・っ・・・相つつ・・・訊いて欲っ・・・しいことが・・・っ・・・」

泪の後遺症で、私はうまく言葉を紡ぐことができなかった。

相葉は、

「うん、わかった。訊くよ。ちゃんと訊くから・・・」

今は、溜めてるもん全部出して・・・いいよ。」

不思議。

相葉には、私の考えていることが、全て分かってしまうみたい。

私は、相葉の優しさに甘えて、悲しみを洗い流すかのように、たくさん、大粒の涙を零した。

そんな私を受け止めてくれるかのように、相葉は私をずっと、抱きしめてくれていた。

死んでから初めての、人の温もりだった。

4話 温もり（後書き）

4話、如何だったでしょうか？

まだまだ未熟ですが、今後ともよろしくお願いします。
ご意見・ご感想等いただけたら幸いです。

5話 「良かった」

あれから暫く泣き続けた私は、
やっと落ち着きを取り戻して、

相葉に今、私が置かれている状況の説明を始めた。

「・・・今の話から察するに、お前はもう・・・死んでる
ってこと・・・？」

だって楠本は今ここに居て・・・俺と話してるのに・・・」

「私にも、良く分からないよ。」

さっきも言っただけど、朝起きたら急にこんなことになって・・・

「

相葉は気を悪くしただろうか。

無理もない話だ。いきなりこんなに現実離れた話を訊いて、
信じる人などそうはいないだろう。

・・・訊かれたとはいえ、何故私は真実を語ってしまったのだろうか？

それがお礼をする、という行為になる訳がないということを、

私は・・・知っていたのではないだろうか。

それでも、自分が楽になりたくて、弱い私はこの人に頼ろうとして
いる。

優しさに、甘えているだけ。

私はやっぱり弱くて、情けない人間なんだ。

暫く、重い沈黙が続いた。

それを破ったのは、相葉だった。

「俺って・・・さ、頼りないかしんねーけど、一緒に居て、手伝うくらいは・・・」

できると思うんだ。・・・って、やっぱ俺じゃだめかぁ？」

そう笑いながら、言ってくれた。

私は、驚いたのと嬉しいのとので、間髪入れずに、

「頼りなくなんかないよ・・・っ！私・・・相葉の優しさには本当に救われてて・・・」

申し訳ないくらい・・・なの。これ以上は、求めちゃいけないって思ってる・・・」

私はなんだか急に恥ずかしくなって下を向いた。

こんなに、自分の気持ちを素直に言っただのも、これが初めてかもしれない。

すると相葉は不思議そうに、

「何で申し訳ないの？俺、暇人だから。手伝いくらい何ともねえよ。」

「「死」」は、冷たい。

実際に死んでみて、やっと分かったこと。

だけど、死んで初めて知った人の優しさや、温もりもある。

相葉に逢えて、良かった・・・。

6話 予感

相葉は、私を支えようとしてくれる。

今の私にとっては、そんなことを言ってくれる人が居る、ただそれだけで救われる。

救われることが嬉しくて、幸せな気分になれる。

そんな暖かい気持ちをくれる、かけがえのない存在、相葉。

彼をこれ以上困らせたくなくて、私はこれから、

決定的に辛いことでもなければ、泪は使わないようにしよう。

そう、心に誓う。

「じゃあ、とりあえず、ここ出るか。」

相葉はポツリと、それでいて少し嬉しそうに、そう言った。
その笑顔に少しばかり疑問を抱いたが、そんな私を尻目に
相葉は階段を下り始めていた。

キンコーン カンコーン

一時間目の予鈴が鳴り響いた。

そういえば、今日は平日。

だから相葉は教室にいたわけで、授業もちろん通常通りあるわけ
で . . . 。

私は、相葉に質問してみた。

「相葉 . . . ? あのさ、 . . . 授業は . . . ?」

相葉は何食わぬ顔で、

「へ??? そんなのいいよ。どーせつまんねーし。楠本だって暇だろ???」

「・・・確かにそうかもしれないけど・・・
やっぱり授業をサボるのは良くないことだし。

さっきだって、自分の気持ち、言えたんだ。今だって言えない筈はない。

「私は、授業出たい・・・けど。」

「・・・言えた! そう心の中で喜んでいると、

「んー・・・。楠本がそういうなら・・・まあ良いか・・・。」

良かった。

私のせいで、相葉をサボらせるなんて、嫌だった。

授業に出るって事は、必ずしもプラスにはならないかもしれないが、マイナスになることは、ないから。

「じゃあ、行こうか。」

私は頷いて、相葉についていった。

私と相葉は、席についた。

「・・・といっても、周りからしてみれば、相葉がいつも通り遅刻してきた」だけののだが。

やはり、みんなに気づかれないことは、寂しい。

だけど、相葉がたまに私のほうを見てくれるので、そのつどそのつど安心した。

放課後

（んじゃ、行くか。）

相葉が私にしか聞こえないような小さな声でそう言った。

私は頷き、席を立とうとした。

それと同時に、未優が相葉のもとに来た。

「相葉、この間の話のことなんだけど今からちよつと、屋上で・・・良いかな？」

「ああ・・・。分かった。」

そう言うと、相葉は小さな紙に何かを書いて、私がいる方向に、少しだけその紙を滑らせて、未優についていった。

（私に、書きおきかあ。）

未優との距離も近かったし、

私と話しているところを聞かれてはまずいと判断したのだろう。

その紙にはこう書いてあった。

「すぐ終わると思うから、先に昇降口行つて。」

私は、荷物を持っていなかったなので、すぐに教室を出ようとしたら、誰かの話す声が聞こえた。

「あれ、ノート忘れてる。相葉のか。そういえば、もうさっき帰ったよな。」

「ああ。でも、これないと、宿題できなくねえ？」
「だなあ。」

それを聞いて、私はノートを手に取りとうとしたが、
そうすると、ノートが浮いているように見えてしまうのではないか、
と、考えを改め、相葉に口で伝えることにした。

（確か、屋上にいるって、言ってたっけ。）

私は屋上に向かって歩き出した。

なんだか、嫌な予感がした。

7話 好きな人（前書き）

読みずらいかと思いますが、
どうか最後まで読んでやってください。

7話 好きな人

私は今、屋上への階段をのぼっている。
相葉に、忘れ物をしたことを伝える為に。

屋上に最も近い踊り場まで着くと、かすかに話し声が聞こえた。

（良かった、まだ居た。）

そう思うと心なしか足が速くなる。幸いにも、屋上の扉は開いたままだった。

・・・とは言え、2人は話している最中なのだから、水を差してはいけないと思い、
入り口のところに隠れていることにした。

「この間の話」って、何だろう・・・？

急にそんな考えが頭をよぎった。

さっき感じた、嫌な予感を、思い出した。

私は、いてもたっても居られなくなり、2人の会話に耳を傾けてしまった。

後のことを考えれば、そんなことをしたら相葉に愛想を尽かされてしまうかも知れない。

でも、それよりも、このどうしようもない不安が、私の心の殆どを支配していた。

心の中で、相葉に謝り続けた。

2人は、黙りこくっている。

未優が、口を開いた。

「で、相葉の、気持ちは？？・・・あたし、ずっと待ってたんだよ？いい加減、答えてよ・・・」
泣き出しそうな声で、そう言った。

(・・・もしかして、この間の話って・・・)

コ　ク　ハ　ク　？

私に黙って、気持ち、伝えていたんだ。

「親友なんだから、もうちよつと頼ってくれたっていいじゃん。」

「私って、そんなに口軽そうかなあ？」

「私の知らないところで、すっごく頑張ったんだね。」

いろんな想いが頭に浮かぶ。

私がひとりで混乱していると、相葉が、少し重たそうな口を開いた。

「・・・宮入、ごめん・・・。俺、他に好きな奴が、居るから・・・。」

・・・好きな人・・・？

8話 きつと、いつか

私は、相葉の一言で隠し切れない程に、動揺していた。理由も、分からないまま。

そうしていると、未優が口を開いた。

「・・・いい。相葉に、ほかに好きな人が居たっていいよ。だから、お願い。」

あたしのことも・・・見て・・・。」

そう言い終えた未優は微笑んでいた。

だけど、私はその顔につたっていた、一筋の涙を、この遠距離からでも見逃しはしなかった。

その表情から、声から、未優の「本気」が伝わってくる。

そんな彼女を見ていたら、何だか、とても切なくなってしまった。

こんな気持ちになったのは、生まれて初めてだ。

切ないって言うのは、こういうことだったのか。

でも、何故私は切ないのか、それはやはり分からなかった。

相葉が何かを喋ろうとした、その時。

強い風が吹き、屋上の扉が閉まってしまった。私は扉を開けようとドアノブに手を伸ばしたが、そうしてしまったら、会話を盗み聞きしていたことが相葉にばれてしまう。

私は仕方なくその場を去ることにした。重い足を動かし、体を階段の方へ向けた。

キィィ・・・

扉の開く音がした。

私は慌てて会談を駆け下りた。

その時にちらりと視線を向けると、下を向いている未優が見えた。多分相葉には姿を見られていないだろう。

安心して、そのまま一気に昇降口のある一階へと向かった。

疲れを知らない私は何食わぬ顔で、1分後に来た相葉に手を振った。相葉の隣には、未優はもう居なかった。

未優は、大丈夫だろうか。

不安になった。しかしその気持ちよりも、相葉の好きな人の方が気になって仕様がなかった。

だからといって、こちらから訊くことはできない。

でも、私は相葉だったら、きっといつか言ってくれる、そんな気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4013a/>

あなたが好きで、

2010年12月14日19時02分発行